

サトウタツヤ

立命館大学文学部教授／研究部長。日本心理学会歴史小委員会委員長。新シリーズの2回目。日本質的心理学会第10回大会を立命館大学で開催したので、今回は「量」「質」ということについて考えてみました。



E. B. ティチナー (1867-1927)

2013年8月末、日本質的心理学会第10回大会を立命館大学で開催しました。この学会が心理学「界」からどのように見えているのかは分かりませんが、社会学、教育学のみならず看護学や言語学の方々を含めて会員は約1000名、当日参加者は（一般参加を含め）500名超を数えました。

折しもアメリカ心理学会が2012年に出版した『心理学における研究方法 (*Handbook of Research Methods in Psychology*)』（アメリカ心理学会、2012）の巻頭論文はウィリッグによる「質的研究における認識論的基礎の展望」から始まっていて、質的研究が心理学において大きな位置を占めています。彼女は、「質的研究とは意味もしくは意味づけ (meaning) に関心を持つものだ」と定義しています。

さて、質的な研究への志向というものは最近のものなのでしょう。今回は20世紀初頭の心理学者ティチナーの『実験心理学マ

ニュアル』から考えてみたいと思います。

ティチナーの名は、要素主義的な構成心理学者として今に残っています。そのティチナーの代表的著書は『実験心理学』全4巻(1901-1905)だといえます。そのうちの2巻は指導者用であり、残りの2巻は学生用です。つまり、この4巻の本は、実験のやり方について、指導者と学生、それぞれに伝えるための一種のマニュアルでした。ティチナーによって、心理学の実験のあり方が定められたのです。現在、心理学を学ぶ人たちは、実験と無縁ではないと思います。その基本的な枠組みを作ったのがティチナーその人だったのです（感謝する人と恨めしく思う人と両方いると思います）。さてこの『実験心理学』全4巻が、量的研究と質的研究に割り振られていたことを知っている人は多くないでしょう。なお、興味深いことですが、ティチナーは最初に「質的実験」のマニュアルを出版し、その4年後に「量的実験」のマニュアルを出版しています。

そもそも、ヴントにおいて心理学に実験が取り入れられたのは、厳密な条件統制を行うことで、意識のあり方を捉えることができる、と考えられたからでした。実験とは、独立変数たる刺激の統制のことに他なりません。したがって、従属変数たる意識のあり方を捉えるその捉え方には「量的」「質的」の異なるモードがあったとしても不思議ではないでしょう。

ティチナーは「質的実験」のマニュアル冒頭で、質的実験の目的は記述であり、量的実験の目的は測定である、としています (Titchener, 1901)。また、質的実験においては、意識を対象にして、注意深く特定のプロセスを「孤立 (in isolation)」させ、その言語報告を行うことにより、意識を完全に記述することを目指すのだ、としています。そして、さらに興味深いことに、量的実験は一連の観察を行い数値で示すものであり、完全な記述を全く目指さない (no attempt at complete description)、としています。

ティチナーは、内観という方法に基づく意識の研究に、量的・質的研究があることを明確にし、それがお互いに排除し合うべきではなく相補的なものだとして主張していたのです。

引用文献

Titchener, E. B. (1901) *Experimental psychology: A manual of laboratory practice, Vol. I: Qualitative experiments, part I: Student's manual*. New York: Macmillan.

参考文献

Giorgi, A. (2009) *The descriptive phenomenological method in psychology: a modified Husserlian approach*. Pittsburgh: Duquesne University Press. [アメデオ・ジョルジ/吉田章宏(訳)(2013)『心理学における現象学的アプローチ：理論・歴史・方法・実践』新曜社]